

デザイナーのための経済コラム(56)

夢か幻か、リアルかフェイクか

入眠時の幻覚を夢と呼び、覚醒時の夢を妄想、幻想と呼びます。当たり前のことですが、どちらの夢も日本人は日本語で見ます。日本語で語ります。また、どちらの夢もその人のそれまでの人生で経験したこと、脳に蓄積された情報でできています。

江戸時代の「士農工商」の身分制度は身分に応じた習慣、言葉遣い、文化を持っていました。そのことは身分に応じて見る夢が違っていたということだと思います。それは個人を超えて生きた時代や住んでいた土地柄、文化を共有する共同体集団にもあてはまることかと思えます。それを人は家風、校風、社風、県民性、国民性と呼んでいます。中国の四字熟語「同床異夢」の「夢」を中国人は中国語で見ていると思います。

「同床異夢」ではなく、「異床同夢」の人たちが集まると、同志となり、集団を作ると、徒党を組むと表現されます。江戸時代の私的、公的な集団を「衆」、「講」、「座」、「結」、「組」、「連」などと呼ばれたようです。現代は「グループ」、「クラブ」、「会」、「組合」、「協会」、「会社」、「連盟・連合」、「党」などと形を変えて、名前を変えて生きています。その中で一番大きなものが「国家」、「連邦」、「帝国」です。

「異床同夢」の人たちは集まって「小異を捨て大同につく」ことで「共同体・コミュニティ」を作ることが出来ます。しかし、一方では「異床異夢」の人たちもいます。言葉が違い、習慣が違い、育った環境が違い、信じる「神」や「教義」など文化の違う人たちです。残念ながら、このように考えると戦争や紛争は必然的に起こると言えます。戦争の抑止は軍備だけではないのはこのことです。

夢か妄想か現実かは本当に区別出来るものなのでしょうか。小説家は現実の世界をモデルにして架空、空想、想像、妄想、幻想の世界を描きます。人は自分に割り振られた役を演じているという人もいます。時代の大きな流れの中で、出自で人生が決まった封建時代ではそのように見ることもできます。人は台本も渡されずにアドリブで生きているようにも見えます。

「天動説」が真実で、「地動説」は「ウソ」であると長い間信じられていました。「神が人間を作った」が真実で、「人間が神を作った」、「神は死んだ」といえば変人扱いされる世界が今もあります。「人間の先祖は猿」は「ウソ」と信じている人が今もいます。「輪廻転生・人は生まれ変わる」と信じている人もいます。「地獄・天国」があると信じている人、信じさせようとする人もいます。

ウソについて人を騙している人は、ウソを意識しています。ウソをつかれて騙されて、それがウソだと気付いていない人にはウソだと認識していません。集団で騙されていればその集団は虚構に、妄想に、幻想の中で生きていることになります。ウソだとわかっていながら、だまされたフリをしている人もいます。「裸の王様」はそのことに気付かせてくれます。

山本七平は第二次世界大戦後に、連合国の将校から「日本人は天皇を神と信じているのか」といわれて、逆に山本は連合国の将校に「日本人が本当にそう信じていたと思うのか」と切り返したという話を聞きました。あの時代はそのような幻想・妄想に本当に信じていた人もいたかもしれませんが、大多数の人は信じているフリをしていただけだと思います。そうでなければ戦後の急速な復興は出来なかったと思います。しかし、フリをしていた(役を演じていたつもり)のにいつの間にか本物になってしまうことが心理学の世界ではありえるとされています。中国に「孟子三遷」の教えがあります。ウクライナのゼレンスキー大統領はコメディアン演劇で大統領役が好評で、本物の大統領になってしまったということです。役者が政治家になった例は日本にも幾つかあります。

カントは「ウソは絶対悪」と言っています。善良な集団が騙されて、それを真実だと信じた人は善良であればあるほど結果的に平気で、真剣にウソを拡散します。現代社会はスマホによってたちまち「ウソ・フェイク」が拡散してしまいます。「ウソ・フェイク」を信じる人が過半数になればその集団、社会は「ウソ」が真実となり、善となり、正義となってしまいます。

「目的」が正しいのか、「手段」が正しいのか、それが問題なのかも知れません。「ウソ」をつくる人は巧みに「ウソ」をつきます。すぐにバレないで拡散し、被害が出てから「ウソ」が問題になります。

マジック、手品、小説、詩歌、絵画、彫刻、演劇、映画、音楽、これらは「手段」です。虚構です。人はこれらのフィクション、虚構を積極的に「良し」とします。これらの手段で目的は「人を楽しませる」、「人を幸せにする」ことで「自分も幸せ」になることです。

歴史資料にも「ウソ・フェイク」があるかも知れません。特に人物像については評価が変わることがあります。吉本隆明は「国民」や「国家」が持つ思想を「共同幻想」としてとらえています。私たちは常に「ウソ・フェイク」と「真実」の間に置かれていると意識しなければならないのかも知れません。

(T.K.)